

126

特11

600

梅治家

家  
輝  
皇  
國  
旗  
筋  
書

全  
書  
冊

088883-000-7

特11-600

全世界輝皇国旗

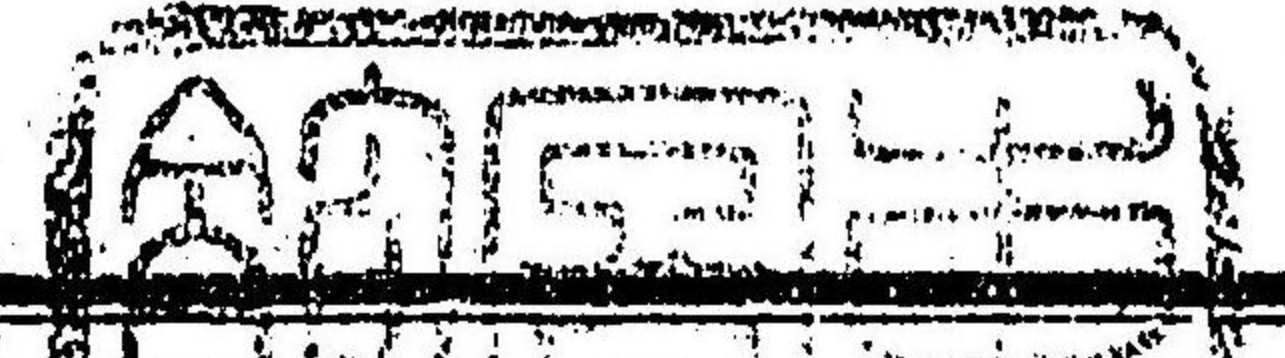
春の家 梅治/著

M27

DBK-0066







當日清戦争狂言の義は**新**○**潟**○**警**○**察**○**署**○**の**○**御**○

**認**○**可**○**を**○**得**○ 永樂座にわめて相演じ大入大勝

利を仕り升たる新狂言に御座候ところ御看

客諸彦の御勤めに不得止今同この筋書を出

致し升たれば該演劇とともに御愛顧御購

求を伏して希上るにこそ

附曰此狂言演し升るに付ては我軍人服制



等其當を得ざる件も有之候へども夫は官  
の許さざるものぞれん咎めなき事を乞

明治甲午

此狂言の著作著

春の家梅治

天長節の日

序文にかへて述

特11  
600

未開の韓土に東學黨蜂起を機會に閩族が叛逆を助くる暴清奸吏正敷道も横濱の全敗  
館に練玉とチーハで金を取る罪を戻して詫る清人が惡戯けさへ開捨ぬラム子も其場  
の鐘砲と向けるれ夏は帝國の義氣に大富慶輔が辯舌鋭き談判に言込られて或世凱  
只一臂の返答も泣ぬ顔する母親に暇を告る軍人が操出す戦地の實況を載て報する新  
聞の留子も同じ愛國心儲の鏡を在韓の兵士へ送る貧者の献金心を盡せし強意見に兄  
の悔悟を眞一が喜ぶ胸は安城渡對ひし敵に勝崎大尉名譽を殘す戦死の魁け猶々進ん  
で牙山の壘落れ深き大同の流れを渡る川嶋が武勇に驚怖左寶貴補料贈みとなせし  
平城の四面を圍む軍略は小津の指那に大城初見約束堅固關門を内より忍びし世良田  
要請明ればドンと込入る日軍降参なせし清兵を縛する矢先に地雷火も巳が手で死ぬ  
豚尾流ドンと響きし大砲に當つて碎く定遠號黃海洋に沈没の底を潜つて抜刀隊三士



が勇は助がの岩上再び會し悦びに昇る旭は五大州へ義勇を示す日本の譽

祝支那 全世界 輝皇國 旗

演劇の脚色 十幕

初幕 ○朝鮮慶尙道昌原近傍の場 ○同茅屋の場

本舞臺總て朝鮮國慶尙道昌原郡茶店の休茲に朝鮮人二人居て(朝)今この朝鮮は閔族一派が政權を握り大院君は世を失ひ久しく日本へ亡命して居た金玉均は閔族の兇漢の爲にとふく上海の日本ホテルとやらで殺されたとの事○此節兩人へ渡り茶店の婆ア因強女出て(因)ね前方の音通り○ト是より東學黨といふ亂暴人が全羅道から起り出し清國から兵隊が來て大騒動夫に又日本からも兵士が來て京城を守護して居ると皆々へ渡り(二人)は這入るト慾逆強出てね袋今度の騒ぎで巴ッ等は詮方がねへ(因)ヲ、梓どうぞ金儲が有ればい、の○ト茲へ支那兵密間房出て(密)其金儲は日本人の間者を押へて差出せば蕪美の金は望次第と此旨合せ有つて慾逆密間通入ト向より道尾究日本留學生にて出て(道)我地理學研究の爲トせりふ有て茶店へ休じ(因)



は日本の間者と思ひ我家へ泊れど勤めて同道する件にて道具廻る

本舞臺因強女内の休娘華華女居る以前の因強道尾を連れて来て奥へ御按内申せト旨

捨て遁入跡華華女は(道)を見染めたるこなしにて耻かしううに言寄る(道)は大事の

望有る身故歸國の上は迎へて妻とするト約束して家体へ遁入茲へ兄慾連出て(道)を

討んどいふ(華)はさうぞ助けてくれト頼む(慾)ヤア大金に成る仕事だト争ふ(華)は

是非なく自害する處へ(因)(密間)出て(道)を捕縛しよふとする(道)何故僕を縛する

のだ(密)汝は日本の間者で有らふ(道)イヤ地理學研究の爲渡韓せし者(密)なんで此

家の悴を短銃にて射た(道)イヤ僕は知らぬ短銃を所持せしは護身の爲だ彼れは正當

妨害トせりふ有つて、細を掛る此時落雷して皆々氣絶する此内に道は逃れ行仕

組宜敷幕

二幕目 横濱支那商館前の場 大富公使殿談の場

本舞臺總て横濱清國商館前の休愛に車夫湯子の三吉同關の丑藏清人漢貫能九連

盲兩人をどらへ居る(三)サーチーへ當て三十五圓早く渡せト言ふ(漢)イヤ私く

し知ません(九)外を尋るよろしい(丑)ハ、悪戯やがるなナト是より兩人は掛いだ金

も是までにとせりふ渡つて金を催促するト、是非なく清人は三十五圓出して渡す爰

へ竹の塚の百姓畑作出で清兩人を見て(畑)おのれは太い奴だト是より練玉の珊瑚珠

で三圓五十錢詐偽やアがつたナトト是にて車夫兩人は○人の難儀は見て居られねへ

日本現ダト三人にて賣る(漢九)は金を戻して○ア、日本は目が高いモウク慾々手

出しはならぬ○ト上手へ遁入跡車夫はあんな奴が前には多いかる朝鮮の騷動ト是を

聞き(畑)へイ夫れでは朝鮮とやらに騒でもムリ外か(三)お前さんは知らぬへか今大



當りの言人が談判最中ト此筋渡り三人は何處かの飲食店で一杯香うト這入直に向ふ  
よ半目連清人の拵にて水屋の娘たなつを引張つて出で來り(半)かの日本の何やらの  
書物に唐も倭も變らぬは色の道ト宣敷口説(夏)エ、モツしつこいチャン／＼坊主  
今朝鮮の談判が極ればお前のやうな奴は首を並べて切て遣よ(半)エ、女の癖に太い  
事を言ふト手を振り上げて打ふとする(夏)アヤね前私しを打つかへ丁度爰にラムチ  
の激是を受けて日本の筒先鋭とい軍人さんと思つて降参しなさんせトラムチを鐵砲  
かわりに打つ(半)はア、痛いト倒れる(夏)アモ仰山なチャン／＼だねへト笑ひなが  
ら這入る(半)は泣ながら日本ニライ女でもアノ通りト臺詞有つて笑止みの唄に成り  
(半)泣ながら這入る○ト知らせにて此道具房應替りに成る(木舞臺)朝鮮京城内應接  
の間の休爰に朝鮮の顯官居てせり有○爰へ閩泳駕出て來り今日日清兩公使入來ト

の事トせり有る○ト爰へ日本公使大富慶輔陸軍少將大城義政兵士巡查總衛して出  
る向ふより清公使袁世凱清兵二人付て出て是より(大富)爰て貴國へ對し我帝國より  
督促中なる御回答殊に必要なるは當朝鮮國は自由獨立の國なるか又清國の屬邦なる  
か確たる御返答承はりたしト最後の談判よろしく有(閩)は國王陛下の裁可を仰か  
されば御確答成り難しト言(大富)コハ貴官の詞ども覺へずトせまふ有て自國の獨立  
と否とを御存じらぬか我國に於ては斯る事は三才の童子もよつく辨へ居ります  
(袁)此中へ口を入れ韓國は我清國の屬邦なり何で獨立と言ふを得んやト是より大富  
袁世凱せりふ渡つてト、(大富)左聲韓國を清政府の屬邦と言ふなれば天津定約ナ  
せ致した(袁)アア(大富)朝鮮國は亞細亞大陸の關門なりトせり有つて(袁閩)兩人  
返答に詰る爰へ韓國王出て(王)日本の厚意謝するに違なし○ト是より皆々へせり有



渡り(王)は三日間の日延を頼む大當は承諾して歸館せんと云ふ此模様宜敷唐樂賑やかなるなりものにて幕

### 三幕目 ○熊本在豊崎村の場

本舞臺は熊本在百姓家の休爰に女房お貞やつし形抱子をかゝへ藥を煎じて居る百姓二人見舞物を持来り(百姓)爰のれ袋が長病氣女の手一ツで嘸なんぎで有う夫に付けても爰の梅次郎どんは熊本鎮臺へ徴兵に行つて此筋宜しく兩人へ渡る(貞)夫梅次郎が母さんの病氣に就いて二周間の服を貰つて歸つて参り升た(百姓)梅次郎どんは孝行者とせりふ有る爰へ石田梅次郎田で(梅)是れはく村内の稻藏源十様とせりふゆる(百姓)コレ梅次郎どんうう堅苦しい事を言ねへでくれ私らはチットも分らねへと是より(梅)は今日清の開戦とせりふ有つて(百姓)はヤマンノ坊主なら擲りの

めして遣りてへ、此筋宜敷有つて百姓兩人は下手へ還入る(貞)は奥へ還る跡床の上るりに成り(梅)此身三年前以前人營して帝國の軍人今日清の開戦と成り假令母の病氣と言を猶豫ならざる國家の大事直嶺鎮臺へ歸營して出兵の列に入らん、愚孝ニツにからむせりふ有て支度を爲す此時上手より母のおせつ病氣のこなしにて出で(母)コレ悴様子に聞いた天晴軍人母に心を殘すなど意見のせりふ有る(梅)は軍曹の服を着替へイデ戦地に向ひなば彼の暴國の豚尾漢と上るり物語りに成り五大洲に日本の義勇を示さん御安堵われど勇ましき件ある(母)チ、出かした早く軍功を聞せてくれ(梅)ハ、おさらばト三人宜敷親子別れの模様にて幕

### 四幕目 ○大坂西濱町真借家の場

本舞臺大坂西濱町清水真一内の休爰に真一マツチの函を張つて居る傍に隣家の女房



居て今朝鮮の戦争とせりふ有つて女房這入ると娘に誠新聞賣の 梓孫忠吉の手を引  
 いて出て来て父さん只今戻り升た(真)ヲ、ね誠早かつたナ(誠)今支那どの戦争に新  
 聞の賣切トせりふ有つて○夫に付けても朝鮮にお出なさる兵隊さんへ慰勞金を皆さ  
 んがお上なさるを我々がトお誠は賣割の九十三錢是に七錢足してお前役場へあけて  
 下さんセト是を聞き(真)ヲ、出かしたね誠ト是より在韓兵士へ慰勞金を上げる手續  
 きを聞いて来ようト這入る跡へ兄善一出て(善)ヲ、妹今日の儲の九十三錢已に貸  
 せと言ふ妹は是を貸せぬト争う處へ真一出て(真)おのれならず者め○ト是より真  
 一お誠兩人にて今日日本は支那どの戦争定めし兵隊さんが御難儀遊ばすであらうおの  
 れが誠の人間ならた上へ願つて義勇兵どの人夫どかに出さふものト此筋の意見のせ  
 りふ渡るト、(善)ア、あやまつたト改心のせりふ有る爰へ巡查長尾正吉記筆野

溝造出て(善)最前前が役場へ来て在韓兵士へ慰勞金の事に附(巡)餘り身形も宜し  
 くないに心掛の殊勝トせりふ有つて(真)我々風情が献金とは恐入りてはムり升れど  
 (誠)心ばかりの慰勞金トせりふ有る(善)どうぞ私を人夫に成りど御拂用下さる様  
 ト頼む(巡)當大阪府下には左様な事はあられど人夫召集の時とならばト(巡查書  
 記兩人)はかゝる婦女子貧者さへ献金なすも愛國心トせりふ皆々へ渡り(子役)朝日  
 新聞の半天を出して日本萬歳と喜ぶ皆々感心のこなしにて幕

五幕目 ○安城渡の場 ○大城少將奮戦の場  
 ○皇軍勝利の場 ○勝崎大尉討死の場  
 本舞臺真中に大きな唐風の板橋正面遠見總て安城渡架橋の休爰へ閔亂走清軍大將  
 の拵へにて浦兵附添出て来り(閔)我國は亞細亞の大國敵對ふ者は命知らずと思つて



居たに今度の戦争〇ト是より日本の武勇に恐れ軍法百計逃るが勝じや〇ト清兵に差  
 圖して橋を落し逃げて這入跡より國野勇軍曹の拵にて日本兵大勢付て出て來たり  
 (國)ヤ、是なる架橋を切斷せしかト爰へ陸軍大尉勝崎直文出て(勝)何故斯る小川に  
 猶豫致す(國)この架橋を落せしからは對岸に地雷火の伏せ有んも計られぬ(勝)ヤア  
 豚尾漢の烏合勢左有る計策思ひもよらず彼の三國の戰に魏勢を白眼退けし〇ト長  
 畔橋の古事を語り勢ひ銳き日軍に恐れて切斷なしたる清兵〇トせりふ有て大同江  
 はまだな事渤海灣も清國へ報ゆる忠武義烈の軍人我につゝいて進めト皆々川を越へ  
 るといふ身支度をする此模様宜敷道具廻る  
 本舞臺成敷近傍の休爰に清將發氣周大城少將立廻り居る(大城)ヤア豚尾漢體に聞け  
 我ころは日軍の旅團長大城義政なり日本刀の切味見せん(發)何をト兩人劇しき立廻

り有つてト、(大城)は(發)を切り倒す件にて道具廻る  
 本舞臺遠く成敷驛を見たる遠見爰に勝崎大尉清兵大勢を合手に立廻り有つて皆々を  
 追込む(勝)成敷の兵を破りし上は直ちに牙山へ進撃なせ〇ト宜敷指揮をする事あつ  
 てト、本鐵砲の音して此玉勝崎に當りしこなし勝崎ハツツリ倒れる清兵側に出で首  
 を掻ふとする勝崎起上つて(勝)チエー殘念〇ト言ながら清兵を切り倒す爰へ國野軍  
 曹大城少將福嶋中佐出て(大城)あつばれ武勇の勝崎大尉を(福)韓土の土ど致せしか  
 (大城)貴殿が成敷の敵を破りト此筋三人へ渡る(勝)ヲ、旅團長直文が討死は軍人の  
 臍を穿る戦死の魁け(大城)名譽、(福)イヤヤ牙山を攻撃せんト此時うしる地雷火  
 の仕掛に成る三人せりふ渡つて(大城)イヤニ勝崎味方大勝利なるぞ(福)イヤヤ牙山  
 を乗取らん(國野)帝國萬歳ト是を聞き勝崎起き上つてにっこり笑ふ此仕組にて幕



六幕目 ○牙山清兵屯營の場

本舞臺總て牙山の休清兵大勢酒を呑て居て(兵)この牙山の大将は女ばかり好で軍の事はちつとも構わぬ(兵)一体臆病な(兵)夫につけても愛妾の新配女を連れて来て酌させようト新配女出て来るをどらへて酌をせよト言て居る時大砲の音する皆々怖りして居るト阿房清兵官大将の拵へにて出て来り(阿)切は日本勢近寄りしかト怖りする處へ旨連清兵の拵にて出て總督へ申上外(阿)其報道待兼たシラ様子は(旨)ハ、大将の下知に隨ひ高陽近傍に五千餘の兵を備へて○ト是より敗走のせりふ有つて下座の唄に成り(お前)一人で逃るは無理だトンン逃りや日本が運ふて射つ大砲かねるよかねトンン(ト)たかかしみ物語りの模倣有つて(旨)是より平城へ落延んア、命が惜しうトトさんに向ふへ這入る跡(阿)は狼狽して(兵)皆々(大砲)を持出す愛へ日兵大勢

出て(阿)をばじめ清兵皆々をぐるぐる巻に縛るト小津中將初見少將出て(小津)陸戦第一着に常牙山を占領する事恐多くも我大元帥陛下の稜威と將校以下の盡忠の成す處○トせりふ渡つて(初見)我軍全勝(兵)皆々(大元帥陛下)萬歳大日本陸軍萬歳と此模倣宜敷哉

七幕目 ○大同江南岸の場 ○同北岸の場

本舞臺一面の山形愛に竹内大尉斥候隊兵士居並び(竹内)イカニ方々我北進軍はトせりふ有つて此大同の南岸に船一艘も有らざれば易意に北岸に到るを得ず(兵士)假令大同大なりとも○ト是より曾根孫六の古事を語り泳いで渡らんト此筋のせりふ皆々へ渡る此時兵士一人出て(兵)只今川嶋義雄殿ニ大同の劇流を渡らんと單身にて飛入升た(竹内)ナニ川嶋軍曹が○ト皆々怖りする(竹内)我も是より騎馬にて渡らんト



兵士附添道入る跡床の上る有りて道具幕を切つて落す

本舞臺大同江北岸の体上る有りて軍曹川嶋義雄好の形にて泳いで出て來り岩角へ登る爰へ以前の竹内大尉騎馬にて出て馬を驚す事有つてト、岩角へ登り兩人顔見合せ無事を喜ぶ(川嶋)コノ大同の急流を亂して渡るも我兵を首尾よく渡して敵の機密を探りト是より兩人平壤攻撃の軍略を語りト、ボートを見て幸ひ是に敵のボートト竹内は是に乗り下手へ道入る跡へ派兵大勢出て川嶋を取巻く川嶋是を合手に立廻り有る仕組宜敷幕

八幕目 ○平壤清軍陣營の場 ○同山手の場

本舞臺平壤清軍陣營の体宋楠村清軍副將にて清兵大勢居て成歡牙山の敗走トせりふ有つて(宋)先日大同の急流を渡りたる日本人縛め捕て繋ぎ置く是れへ引出せト清兵

向ふへ道入る直に前幕の川嶋に繩を掛け引出す爰へ總督左實貴大將にて出て來たり

(左)汝は何者だ(川嶋)ヲ、イカニモ日本帝國の軍人ヲ忝なくも大命に依て暴國清を討ち半らざる日本男子だ(左)ア、大鹿馬者め我清國は國に四億萬の民を有し海に數百の軍艦あり小嶋の日本清國に敵對ふは處に鵝卵を打つにひとし〇ト是より(左)は大言を吐く(川嶋)ヤア井の内の蛙大海を知らずとは已等の事々四億萬の民は有れど臆病未練の弱虫めら夫に引替我帝國は義侠に富み弱さを助け強さを懲す一國の美風是日本魂大丈夫のなす處だ汝清國朝鮮を苦しめ其國を奪はんとすを傍觀なし離く平生の義心に訴へ暴清を討つ一戦〇ト是より清國の暴行不禮を一々言ふト、(左宋)兩人言ひ詰られる(川嶋)清國強と申なれば去る七月廿五日豊嶋附近に海戦に續ひて成歡牙山の陸戦日軍の爲に打破られ軍艦二隻沈没され三百餘名生捕られしは何事だ



是でも清國強なるか見よ〜今に我軍は北京城を攻落し歐米各國へ譽をわけん〇ト  
せりふ有つて遂に(宋)軍刀を抜き切り付る是にて細切れる(川嶋)繩を切しは清國の  
暴を憎む天の加護ト是より大勢を合手に一寸立廻り有つて道具廻る

本舞臺城内山手の体上る有りて以前の川嶋清兵大勢を合手立廻り乍ら出て皆々を  
切倒しホツト一息する此時劇賊の音に成り(川嶋)扱は清兵多勢を以て我を取巻か  
イヤ此上は割腹なして相果んヤア〜豚尾漢體に聞け日本帝國臣民川嶋義雄が長期  
を見て軍人の手本にせよ我皇國四千萬の同胞ヨ今義雄が奮死を聞き恨は共に天津奉  
天北京城を陥落せよ〇ト腹を切る爰へ世良田勇吉日本兵の拵にて出て(世)ヤ日本人  
ト引起し顔見合せ貴殿は(川)我は斥候隊の軍曹と兩人せりふ有つて(世)我は是より  
玄武門をト行ふとする(川)エノ險阻を左手に取りト道を教へる事有つて兩人別れを

演みト、(世)は(川)の首を切る件にて幕

九幕目

〇平壤玄武門の場

〇同附道の場

〇同地雷火の場

本舞臺唐風の城郭を書割たる道具幕爰に黄海海軍指揮官清兵大勢居て此度大同江近傍  
に於て生捕たる日本軍人繩を切つて逃せしに裏手の山に背のなき死体の有しも不思  
議然るに不意に日本軍四面一度に攻寄せしは味方にとつて一大事と此筋皆々へ波り  
這入るト知らせにて道具幕を切て落す正面大きな唐風の關門門を取附たる  
鐵雨開の扉左右岩組の張物總て玄武門の体床の上るりに成上(鎗林中の要害と  
清軍爰に屯なし)下略ト向より前幕の世良田勇吉清兵大勢追掛け出て來り(世)ヤア  
要害堅き玄武門〇トせりふ有つて味方を引入れ勝利を占るは(清兵)ヤア城内へ入し



は袋の鼠ねずみ討取れ世よナニぞ是こゝより劇はげし立廻り有て世よは門かどに手を掛る皆々  
 鐵砲てつぱうにて討うとどする世よヤア劍つるぎたるか銃砲じゆうぱうも當あたらば當れ討うとて〇トせりふ有つて  
 門かどを取る皆々みなく拘くわりする此時門かどの扉ひら左右みぎひだりに開ひらく、兼な尾お出での日本兵にっぽんへい並なら能よく鐵砲てつぱうを構かま  
 へ居ゐる上うへ末世まつせに傳世つたせ良田らしたが名譽めいよ武勇ぶゆうは頼たのひぬらざりけるト此任組このしんぐみに道具だうぐ廻まる  
 本舞臺ほんぶたい平城裏手へいじやうり開道かいだうの休爰ていゐに軍曹國野勇ぐんそうくによゆう消兵大勢しょうへいだいせいを合手あてに立廻り居ゐる兵皆へい此平城  
 の開道かいだうを國野くによヤア歐亞おうあの大陸騎行たいりくきかうして地理ちりに詳しらし福嶋中佐ふくしまちゆうさ小津師團長おつしだんちやうの軍略ぐんりやくに  
 トせりふめてつて消兵しょうへいを退たて還入まゐり道具だうぐ廻まる  
 本舞臺ほんぶたい消軍陣營しょうぐんじんゑいの休爰ていゐ朱柿しゆし消兵地雷火しょうへいだいちがを伏ふせて居ゐて宋そうコリヤ降参かうさんの旗はた立たげ  
 ば敵てきは猶豫ゆういの其間そのまに逃にげば成ならぬト皆々みなくへ渡わたる爰こゝへ指し揮ひ官くわん出でて指しコリヤ者共しやうきやう會あひ  
 たる地雷火だいちがは伏ふ置おかた是こゝは我々われが降参かうさんなせしと見みかけて日本勢にっぽんせいを此處こゝへ引ひ入れ

皆殺しにせんと左實貴將軍さじやくきの設計けいけい宋そう流石りやくしは大將だいしやう指しイヤ其大將そのだいしやうも一徹いつてつにて遂つひに大  
 城少將おしろしやうの爲ために討うとれ是こゝより皆々みなくは大將だいしやう討うとれし上うへは少すくしも早はやく逃にげふ宋そうトハ言いひ城  
 内の寶藏ほうざうには金銀山きんぎんざんの如ごとくあり敵てき此處こゝ捕とるよは惜おしいわへ指しイヤ地雷火だいちがの設計けいけい圖  
 に當あたらば我々われが勝利しょうり兵へい早はやくお逃にげなされ射やせり立たて花道はなだうへ行いく此時揚幕このときやうまくより  
 消兵大勢しょうへいだいせい逃にげて來きる跡あとより小津中將福嶋中佐おつちゆうしやうふくしまちゆうさ跡あとより日兵大勢にっぽんへいだいせい出でる是こゝを見みて拘くわりして  
 東あづまの揚幕やうまくへ逃にげやうとする又東またあづまの揚幕やうまくより大城少將初見少將跡おほしろしやうしよけんしやうしやうあとより兵士附出へいしついでる又拘くわり  
 戻もるト上手かみてより大坂少將國野勇兵士附出おほさかしやうくによゆうへいしついでる是こゝにて消兵しょうへいは是非しやうひなく舞臺ぶたい真中まぢゆうへ戻もる  
 小津おつ汝清兵降参なんぢしんべいかうさんの旗はたを立たてながら命いのちを惜おむ致いたし方かた大城おほしろ逃去にげまんどは兵法へいぽう至極しごく初見しよけん  
 我帝國わがていこくは人命じんめいを重おもんじ大坂おほさか捕虜ほりよと雖なも命いのちは絶たえず福嶋ふくしま是れ義俠國文明ぎぎやくこくぶんめいの戰爭せんそうなり  
 國野くによハヤ降人かうじんの責務せきむを尽つくせトまづばりいふ此時地雷火このときだいちが破裂はくはつして消兵しょうへい苦くるしじトハ



ツクリ落入る此人數皆と舞臺へ来て(小津)扱は豚尾漢與怯者我日軍を討んと地雷火を伏せ置しか(大城)已が手に成る計策に(初見)命を斷つころ(皆々)愉快々々ど笑ふ仕組幕

十幕目 ○黃海洋海戦の場 ○旅順口岩上の場

本舞臺一而黃海洋の道具下手に帝國軍艦の船を出し正面奥に日清の軍艦澤山あり大さつたの頃有つて納るト日艦より鐵砲の乱射ある海軍司令艦長神山中將出て(神山)ヤア敵艦列を乱せしヲトせりふ有つて皆入ト雙方より銃砲の乱射有る喇叭手白浪仙音出て敵丸に當り心にてパツカリ倒れる向ふ清艦沈没する此處へ神山出て(神)ヤ、白浪にはト引起す(白浪)艦長敵丸十發までは知つて受升たがトせりふ海つて我恨は清艦定遠敵を取つて(神)ヲト今自前には定遠を沈没させんと上るり有て進入隊大

砲の音して正面の清艦に當りし心にて是より清艦仕かけにて焼失する此時抜刀隊の將校倭後男守武四郎荒男猛何れも軍服にてボート乗り出て(倭)ヤア、豚尾漢我々は抜刀隊なり(守)日本刀の切味見せん(荒)イテ勝負ト(三人)決せよト清艦の傍へ漕行く此時清兵又ボートに乗り出て来て是より雙方のボートの上にて入乱の立廻り能き程に舞臺一面の波底ト見たる布を引上る電氣作用にて此中を寫す此中に守武清兵を二人合手に軍刀を振り上げ一人を引付け居る(以前のボートより三人組付たる艦海底に沈んだる様を見せる)直に波布を切つて落す後る二面居處にて替る本舞臺渤海を見たる遠見屋中に大きな岩盤此上に以前の三人居て(倭)コレ守武しつかりせんか(荒)心を付けらト兩人介抱する事有つて守武心付き三人無事を喜ばせらふ漕つて(倭)我々生命の有ん限りは豚尾國の首府を攻め落し〇トせりふ有つて



(倭)是が軍人の(三人)責任だ○ト此時後の波間へ紅絹張の日の出を見せる(倭)浪間に輝やく日の影は(守)取りも直さず帝國の(荒)義侠を示す大隊旗(倭)實に日本の(三人)勳功じやなア○ト手を合せる此仕組よろしく賑に  
目出度打出し

(作者曰)猶九連城の略取奉天府北京城陥落より大日本帝國全勝陸海軍凱旋の狂言取脚色相演じ申へく候間御愛觀の程伏て奉希上候

明治廿七年甲午十月我軍大勝利の日

明治廿七年十一月三日印刷  
全 十一月八日發行

(定價五錢)

新潟縣新潟市中大畑町二十一番戶寄留

東京府平民

編輯者兼 金子萬治郎

全縣新潟市古町通三番町七十三番戶

印刷者 濱田清

全縣新潟市古町通三番町七十三番戶

印刷所 自由新報社

賣捌所 當狂言興行場内

及各書林



